篠原卯吉先生を偲んで

取締役副社長
技術開発本部長　太田宏次

当社前顧問、元名古屋大学学長、工学梅士　篠原卯吉先生の訃報に接し、まことに痛惜の念に堪えません。

先生は大正15年九州帝国大学工学部電気科をご卒業になり、昭和15年名古屋帝国大学教授、昭和38年同大学長に就任されました。学術会躁会員・郵政省電波技術審議会会長など多くの要識を歴任され昭和48年には煎一等瑞宝章の栄誉を受けられました。

当社においても昭和44年から18年間に亘り顧問をお願いし、雷気事業経営とくに技術開発に当たってのご指祁ご助言をたまわりました。先生は、豊富な経験と高い見織をもって、人材育成に尽力され、当社はもとより地域全体の電力技術向上に多大な貢献をされました。

ここに先生のご偉業に深く敬意と感謝の意を表するとともに、細んでご冥福をお祈り申し上げます。

先生の思い出

愛知電機脚常務取締役
元中部電力総合技術研究所担当　大坪重遠

中部屯力の屑澗をしておられた恩師篠原先生が、長野支店の視察にこられた。ご案内したある朝食でのことである。密舟を目前にした先生が、こともなげにご飯のお代わりをされ「人間、なんと言っても内臓が丈夫じゃなくちゃいけませんぜ」とおっしゃった。

そういえばご本人から伺ったところによると、先生が名古屋大学におられたとき、ぜんざいを何杯食べられるかのコンクールでチャンピョンの栄牲をになわれ、その記録は今だに破られていないとのことであった。

他方、先生は歯ではご苦労をなさった。診察した医学部の某教授が歯を全部抜いてしまった。そして後E1、その教授が篠原先生に言うことには「索直に全部抜かせたのは先生が初めてです。こうなった以上は命に懸けて先生の歯に毀任をもちます」。「ところが、その教授が私より先に亡くなったんですわい」そんなことをおっしゃって皆を笑わせられるのであった。それでも、お食事はなんでも大変によ<召し上がっておられた。

80才を越されても嬰辣とされ、斯界の重鎮としてご活躍なさった原動力は、明晰な頭脳の他にもご自身でおっしゃったとおり、内綴の並外れた強さにもあったように思う。

先生は自宅を他人に訪問されるのを好まれなかった。しかし、中部危力の総合技術研究所に出勤しておられる時はまったく反対で、お訪ねすると次から次へとお話が絞き、なかなか離したがらぬご様子にも見受けられるのであった。

先生は気体中の放電の研究がご専門であった。だから学生の頃、大学の研究室でこの分野のお話を存分にIiりかせていただいたのは当然である。あの独特の「コンダクチビチイ」という発音がまだ耳に残っている。

しかし、私が昭和58年に総合技術研究所に転勤し、再ぴ啓咳に接するようになってから最も数多く聞かせていただいたのは、放射線の人体に対する影響についてであったと思う。先生は、そのテーマで小111}子まで作っておられた。その内容は、いま巷1iりに放射能が怖い、危険だという声が高いが、それについては、すでに世界中の専門家が国際放射線防護委員会という機関を作って投年研究を続けてきている。その結果では、放射線がある¯定以下のレペルであれば、生物に対する彩際は観測されない。原子爆弾と原子力発電所とは、レペルが全然迄うのだという主旨であった。

先生は人を見て法を説く天賦の交質を駆使され、相手のレベルに応じて実に上手にこの放射線のお話をされた。年中行事となっていたご節人たちの研究所の見学会でもよく講話をお願いしたし、かって名古屈大学の学長を勤められた大学者の熱のこもった、この放射線についてのお話は、いつも大した評判であった。

平成2年3月、先生の米舟を祝うバーティ席」こでのレクチャ¯にも、このテーマから入られた。そして長いレクチャ¯の最後を、俗世の戸窃な雑音の中にこういう科学的な事実が埋もれ、ともすれば技術が軽視されかねない現状について、我々後進に¯段の柄起を要硝された。

思えば明治のR本は、先進国に追いつくぺく文明開化の旗印を掲げ、技術の吸収に貧欲で学者を諄狐する若々しい空気に満ちていた。その空気の中で育たれ、正論を大声で主張された先生のご逝去に辿ったいま、まさに、巨星墜つの感を禁じえないのである。